

ペルー 中国と日本以外への柑橘類輸出が増加

[FreshPlaza](#) 2025年7月18日

ペルーの柑橘類輸出は中国向けの減少にもかかわらず、ヨーロッパとアジアへの出荷が増加

2025年のペルーの柑橘類セクターは、2023年に影響を受けた気候関連の課題からの回復の兆候を明確に示している。柑橘類協会の統括マネージャーであるセルヒオ・デルカステージョ・バルデラマ氏は、「今年の第27週(7月初頭)までの輸出は前年同期比で29%増加した。これは、ウンシュウミカン(+88%)、プリモナーレ(+200%)、ノヴァ(+112%)、ユールカレモン(+233%)、タヒチライム(+29%)などの早生品種の回復を浮き彫りにしている」と述べた。(以下「」は同氏の話)

「マンダリンは総輸出量の65%を占め、引き続き輸出をリードしている。マーコット、タンゴ、ナドルコットなどの開花の遅い品種は、2023年の14万4千トンから今年は19万5千トンに増加した。しかし、実際に全体を押し上げたのは、2023年に50%下落した早生マンダリンの回復であり、今のところ最大150%増加する可能性がある。」

栽培面積は2021年以降、概ね横ばいで推移している。「農業振興法の廃止と物流費と人件費の増加により、特に利益率が低く、生産者の多くが中小規模であるセクターでは、新規投資が減退している。」

「柑橘類はコストに敏感である。10セントの価格変動で、生産者の利益の3分の1を失う可能性がある。」同氏は、新植が進まなければ、輸出は2030年までに停滞する可能性があるかと警告した。

「米国市場は引き続き安定しているが、ヨーロッパ(+106%)、アジア(+103%)、ロシア(+174%)で顕著な成長が見られた。ただし、ロシアはまだ量が少ない。中米向けの出荷の盛り上がり(+73%)は、輸送時間が他の地域より短く、より新鮮で競争力のある果実を配送できることで説明される。これとは対照に、中国と日本への輸出は、物流上の問題と、柑橘類が長距離輸送に敏感であり、着荷時の受け入れに影響を与える外見上の損傷を引き起こすために減少している。」

品種の多様化も優先事項である。チリ、南アフリカ等の国がカバーできる4月と5月の品不足を埋めるため、特許取得済みの新しい品種がテストされている。タヒチライムの輸出は増加が続き、今年は5万トンに達する可能性さえあり、強い国際需要があり国内でも受け入れられる品目としての地位を固めている。

「新しい農業法(国会で改正を審議中)の承認と農村部の治安の改善は投資を促進する鍵であり、特に色の良い柑橘類を生産できる可能性が最も高い南部地域において重要である。しかし、構造的な支援がないため、近年の世界的な成功にもかかわらず、ペルーの柑橘類の競争力は低下する危険にさらされている」と同氏は結論付けた。

執筆者: ダイアナ・サジャミ